東奥日報社提供

東　奥　日　報
2023年（令和5年）6月17日（土曜日）（23）

八工大 伝統継承へ熱

来月15日 小唄流し踊りデビュー

7月15日夕に八戸市中心街で行われる八戸小唄流し踊り（東奥日報社主催）に、八戸工業大学が初参加する。元々は2020年から参加する予定だったが、新型コロナウイルス禍の影響で中止が続き、ようやくデビューが実現する。今回参加する感性デザイン学部2年の学生ら約20人は、市民に長く親しまれている八戸小唄の歴史について学んだほか、16日からは踊りの練習をスタート。若い力で本番を盛り上げようと意欲を高めている。（白鳥遼）

「最近の学生は生活スタイルの多様化からか中心街に繰り出すことが少なく、そこで行われるイベントや行事への参加もあまりないようだ。八戸小唄流し踊りは、地域に根付いた文化を知るいい機会」。同学部の川守田礼子准教授は参加の狙いをこう説明する。

学生らは9日の講義で八戸小唄について学んだ。同大非常勤講師で県文化財保護協会会長の滝尻善英さんがレコード化90周年をテーマに教壇に立ち、地元の情景が盛り込まれた歌詞や、曲の誕生の経緯などを分かりやすく教えた。滝尻さんは「八戸小唄は地域色豊かな地元の宝であり、学生たちに知識や歴史的背景を知ってもらいたい。八戸小唄を守り、育て、伝えていくことが大切」と語る。

泉さん（手前右）から踊りの手ほどきを受ける八工大の学生たち

八戸小唄の成り立ちを学生たちに説明する滝尻さん㊨

そんな八戸小唄に合わせて踊る練習は16日に始まった。日本舞踊泉流師範の泉彩菜さんから手足の使い方などの手ほどきを受けた学生たちは、慣れない動きに苦労しながらも少しずつ踊りを覚えていった。参加した吉崎結花さん＝青森市出身＝は「本番では、きれいだなと思ってもらえるように踊りたい。若い人たちも見に集まると思うので、伝統を大切にする思いが広がっていけばうれしい」と笑顔を見せた。

泉さんは「やっと八工大がデビューできる。沿道の期待に応えられるよう、若さと元気あふれる踊りを見せてほしい」と期待を寄せた。学生たちの練習は本番直前まで続く。

八工大では、伝統の継承などにつなげたいと、20年度から「地域文化論」の講義に八戸小唄流し踊りを盛り込んでいるが、コロナ禍により、練習の成果披露は学内発表にとどまっていた。川守田准教授は「八戸小唄流し踊りに参加し、踊ってみて感じた思いを大切にしてもらいたい。令和の自分たちが伝統を受け継ぐという自覚を持ってもらえれば」と語った。

八戸小唄流し踊りは八戸小唄の誕生40周年を記念し、1971（昭和46）年から開催されている。

※「この画像は該当ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」